

7 仏教における二つの「無礙」思想について—現代西洋哲学倫理思想との対照—

【全4回】／開催方法：ハイブリッド

しもだまさひろ
下田正弘

武蔵野大学教授
東京大学名誉教授



受講料 会員料金：¥9,000 早割価格：¥8,000(納入期限：6月4日)

【日程・時間】【全4回】6月10日(月) 13:20~14:50・15:00~16:30
6月11日(火) 10:30~12:00・13:20~14:50

■受講に必要なもの

[テキスト] レジュメ配布

人類の歴史において、故郷を喪失し、流浪の民となった民族に、ユダヤ民族とチベット民族があります。一方のユダヤは、三千年を超える時をかけて、故国を「恢復」し、そこを定住の地とするために異邦人を排除し、暴力を発動しつづけています。それに対し、チベットは、異郷の地に、みずから異邦人として身を置いたままに、暴力を徹底して放棄し、仏教の実践と布教に専心しています。

きわだった対照をなすこの両者について、一見すると前者に胆勇を、後者に怯弱を見てしまうかもしれません。けれども、人類の悲願である平和は、間をおかず、即刻に実現されるべきものであり、かつそれは自他の別なく、万人に通じるものでなければなりません。あらゆる蛮勇は、それがふるわれるまえ、時間を一瞬、宙づりにし、その隙間に、「他」を「自」に取り込む策略と力が整えられています。暴力の執行を可能にするもの、それはこの「時間の繰り延べ」にあり、そこには「他」をまえにして「自」が崩壊し、消失することを恐れる怯懦があります。

積尊以来、托鉢と遊行を説き、智慧から慈悲への展開を説く仏教の実践には、人間の意識の深層に宿る、この本性的な障害を超え、平和を実現する倫理的、哲学的思想の可能性が秘められています。その完成された思想は、華嚴にみられる二つの「無礙」、すなわち「理事無礙」と「事事無礙」に確認することができます。かつて鈴木大拙は、日本が滅び去らんとする戦中から戦後にかけて、この思想こそが世界平和を実現し、日本が立ってゆく基礎になることを切実に訴えていました。

この仏教思想の完成された内容は、現代の西洋倫理思想と対照させることによって、新鮮なかたちで明瞭になってきます。本講義では、この二つの「無礙」思想の内実を、現代の西洋倫理思想を代表する思想家であるエマニュエル・レヴィナスの所論と、それを精緻に批判したジャック・デリダの思想を対比することによって、解明します。これを通して、世界平和を実現する仏教思想の可能性と、それによって日本が進むべき道がみえてくることを期待しています。